

友子

(ともこ)

高橋揆一郎

友子

(ともこ)

高橋 揆一郎

河出書房新社

友子 (ともこ)

一九九一年三月一二日 初版印刷

一九九一年三月二〇日 初版発行

著 者 高橋揆一郎

装 丁 田村義也

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 三四〇四―一二〇一 (営業)

三四〇四―八六一一 (編集)

振替口座 (東京) 〇―一〇八〇二

印刷 大日本印刷株式会社

製本 小泉製本株式会社

©1991 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN 4―309―00675―2

友

子

(ともこ)

良作がトモコという呼び名を聞き知ったのは小学校にあがるころだが、その正体がまるで腑に落ちなかった。女性の呼び名であろうことを疑いはしなかったけれども、その名を名目にしておとなたちが寄り合い、むずかしげな相談をはじめることになじめなかった。その場にトモコという名の女性が同席したためしがない。

良作の長屋の近くに実際にトモコという女の子がいた。良作の父親とは暮の仲間の原野さんの一人娘がそれで、良作よりは二つ年下の原野友子。お河童の頭が人形のように形がよく、ただの坑夫風情にあのような子が生まれたのはめずらしく、あのぶんでは頭風などたかっていないのではないかと母親も姉もいつていた。良作はトモコの語感からなんとなく女の固く締めた帯や袂裏

などを連想していたから、ひげをはやしたおとなたちがトモコの集まりだといってはお辞儀をし合ったり書き物をひろげたり酒を飲んだりすることが腑に落ちなかったのである。

良作の父親は高橋菊五郎、母がキク。良作がトモコの不可解さに首をひねっていた学齡期前後のころ、高橋の子供は長姉の下に男ばかり五人が連らなり良作はその四番めであった。

父親菊五郎が妻子を引き連れてその終焉の地である北海道空知郡の炭砒まち歌志内村に落ちついたのは昭和二年のことで、良作はその翌年に生まれた。

歌志内は石狩平野の東北隅の山麓地帯にあつて石炭以外にこれといった産業のないまちだ。まわりを山に囲まれ、東西に流れるペンケウタシュナイ川の兩岸のわずか十キロメートル余の平坦地や斜面に大小の炭砒事業所や住宅、市街地が立ち並ぶというなぎの寢床のまち。

明治二十年ごろ北海道庁の手で地質や砒床のありかがさぐられていらい、炭砒のまちとして生き続けた。石炭がみつかつて村ができたのである。

そのころはまだ狐や狸やカワウソがたくさんいて、なぜだか鳥がいなかったというが、空知炭砒という会社が開坑すると、本州内地から入植者がどんどんやってきて請願巡査の派出所が置かれ、市街地ができていった。鉄道が敷かれて停車場ができる。寺が建ち私立の小学校が開校し炭砒病院もできたがみな原始林の中だ。

明治二十八年には国木田独歩が訪れ、案内人を雇って熊笹の山道を歩き回り、のちに『空知川

の岸辺』を書いた。

神社は明治三十五年に建ち、小学校は公立となつて児童数もふえ、劇場が幟旗のぼりをひるがえし、ぬかりなく遊廓も生まれた。伝染病だの火事だのと苦勞をしながら明治年間に大方の基盤ができ、以後大正、昭和と石炭ひと筋であつた。町制施行は昭和十五年で、ちょうど紀元二千六百年の祭りと重なつたので良作も学校から紅白の餅をもらい旗行列をやつた。

昭和三十三年に市に昇格したが、平成の世となつたいま盛時の面影はない。

父菊五郎は宮城県桃生もへう郡小野村の百姓の出である。四万分の一の地図をさぐると松島湾の北岸に鳴瀬町という町があり、横に括弧入りで小野とある。小野村はとうに合併されていまは鳴瀬町である。

亡父の若いころの消息は良作には霧の中だ。聞き覚えてゐるのは日露戦争に従軍し、その後船乗りになつたということだけである。

三十歳を前にして北海道へ渡り、着いたところがオホーツク沿岸の興部おこべという港町。なぜここを選んだかも謎で、ものを書くようになってから良作はこの間の事情を知りたがつたけれど手掛りがなかつた。

小理屈をいうなら高橋菊五郎が北海道へ流れ着かなければ北海道人としての良作はなく、いまごろはどこかの本州人であつたかもしれない。

そのよしあしではなく、北国の風土に培われた良作の精神構造といったものが、もし他の風土を母胎としていたらものごとについてどんな考え方や感じ方をし、どんなことば遣いをし顔つきもいまと同じだったかどうかと想像するのは何だか気味の悪い遊びである。

宿命論ふうになるけれど、三十歳を目前にした宮城県小野村出身の船乗り高橋菊五郎の脳裡に北海道移住の決意が生じた瞬間、良作という北海道人の誕生が約束されたわけだ。

たしかなことや詳しいことは不明のまま多すぎるが、つくづく死者は無責任なものだ。生きてゐる者に戸惑いや疑いを置きみやげにしたまま恬としている。

興部に着いた菊五郎はそこで何をやったかというと渡し場の船頭をやった。船乗りの前歴と符合するし船への執着も感じられる。

そして土地の女佐藤キクと所帯を持つ。菊五郎二十九歳、キク十五歳。キクの十五歳は現今では幼な妻だが、あの時代少しもめずらしいことではない。

船頭をやめ、畑作に転じて長姉以下次男までの三児をもうけ、以後造材人夫、金属鉋山、カラフト出稼ぎ、夕張炭山を転々としたあげく昭和初年歌志内炭山に住み着く。

ヤマの名は住友上歌志内砵。まちの東のどんづまりのヤマだから上をつけて上歌志内である。つづめて上歌と呼ばれていた。東の山から日々まあらしい日が昇った。

昭和五十年代のなかば、良作はある教育関係の出版社からの依頼で、廃止目前の鉄道を取材す

るために網走へいった。

網走駅からオホーツク沿岸に沿って北へ、上湧別かみゆづつという駅までの湧網線うづみづせんと呼ぶ区間が廃止の対象となっていて、たった一輛のディーゼル車の乗車体験記を書くためだった。

四月中旬の、流水が沖合に去る海明けの時期で、網走国定公園の車窓の眺めには満足したが、上湧別駅に降り、駅前旅館に着いて少し原稿を書き、さて夕食というときに身に覚えのない悪寒に襲われた。

風邪でもない、貧血でもなく、思い当たることがないまま横になるしかなかった。ディーゼル車での車酔いを疑ったが車中ではそんな自覚はなく、だいいち乗り物酔いなどは子供のうちに免疫になっていた。首をひねりながら横になっているうちに悪寒は去り、代わりに吐き気がきた。そこへ夕食の膳が運ばれてきた。

この地の名産はホタテ貝である。本場の新鮮なそれをたのしみにやってきたはずだが、胃袋はついにひと箸も受けつけなかった。食道の入口に南京錠でもおろされたみたいだった。そればかりかグラスについだビールすらだめだった。

宿の者には乗り物酔いということにしてそっくり返膳する羽目になり、床に入っていつまでも天井をみつめていた。

夜半に少し空腹を覚え、宿を出て近くの寿司屋に入り、少量の酒を流し込んだけれど、固形物は小鉢の付出しすらも受けつけず、むろん生寿司などを見るのもいやだった。良作は自分がどう

かしたのだと思った。

眠るだけは眠り、朝を迎えるですっかり回復していた。運ばれた朝食をとりながら帰りのダイヤを調べようと時刻表の路線図に目をやっているうちに、この先に興部という町があることに気がついた。

まさかと思ひながら昨夜来の不調に考えがゆく。興部は明治末年に亡父菊五郎が北海道に入植した最初の地である。ここで母親キクとの間に姉と長兄、次兄の三人が生まれている。そういう因縁の地に目と鼻の先まで近づいていながら一顧だにせず、ひとり美食の膳につこうとした四男坊にあの世から打擲が加えられた……としか考えようがなかった。

石油ストーブがちろちろと焰をたてる六畳の部屋に朝の光が溢れ朝食の膳を照らした。宿の内は静まり返ったままだ。

良作は自身がたてる食器の音や咀嚼音のほかにも同じ音を聴いたような錯覚に陥った。十万億土の向こうでも、いま父や母やどっちも父の享年を超えられなかった長兄や次兄が飯台を囲んで朝食をとっているまぼろしが湧いた。こっちは一人で向こうは四人。こっちは宿の膳、向こうは母親手作りの膳。良作は箸を持つ手で片手拌みをしながらめしを噛み、味噌汁を啜った。

そして死者たちを強く意識するようになった。

まだ母親が生きていたころ、良作のところは家族が多いため坑夫長屋を端から二戸続きで借り

ていた。そういえば妙な若い者がひとり同居していた。

良作たちがオガワのシロと呼び捨てにしていたこの若い衆は「寝小便たれ」であつた。十八か九にもなつていたようだが、寝小便のくせがなおらず、母はシロの寢床に棧俵（コメ俵の蓋の部分）を押し込んでいた。

朝がくると濡れた棧俵が家の前の花畠の垣根に干されかすかな湯気をたてていた。棧俵はすぐに赤茶けてときどき新しいものにとりかえられていたようである。

オガワのシロはいつのまにか姿を消したが、良作にはその素姓がまるでつかめなかつた。ただひとつ、この若い衆にはオガワのシロのほかに、まれにコブンという呼び名が使われることがあつた。

それがあのトモコとかかわりがあるらしかつたのだけれど、しかし寝小便たれのコブンは良作たち兄弟の軽侮の的だつた。

トモコといえは今晚その寄り合いがあるというときは、母や姉が支度で大忙しであつた。そこでたいていおとなたちは酒を飲んだ。酒の肴に菊五郎が鶏を絞めるのはそんなときで、必死に暴れるのをじたばたしるな！　といって膝の間に抱え込み、庖丁で喉首を切り、逆さにして滴り落ちる生血を小皿に受けて飲む菊五郎を良作は恐ろしいものに思つた。

母親が死んでから四年ほどたつて、良作の家は新築の長屋に引越し、良作も小学三年になつていたので、このあたりからトモコは少しはつきりした記憶のうちにある。

新しい長屋で開かれるトモコの集まりには近くに嫁いだ姉と婚家の小姑たちがタスキがけで狩り出されていた。良作たち小学生の下の人々は早々に寢床に追いやられるのだけれど狭い坑夫長屋のこと、枕元におとなたちの押し殺した声が潮騒のようにひびいて眠るどころではなかった。なんの評定か知るよしもないが、おとなたちはトモコという名の女の神様が妖怪のようなものにとりつかれているのはたしかであった。

良作は車座の中にひろげられた巻紙のようなものを盗み見たことがある。なにやら忠臣蔵の義士の連判状のようなもので（それは実際にハンコが押されていたから連判状そのものだが）、姓名の下に四角の坑夫の実印が押されていた。

六年生の三兄がこっそり耳打ちしてくれたことばに「ケンカコーロンイタスマジキコト」がある。連判状にはそういった約束ごとまで誌されていたようだった。

寄り合いはこうした談合のあとで酒になった。おとなたちはびちゃびちゃと舌を鳴らしカチャリと酒器の音をさせたりで、わりあいおとなしく酒を飲むのだった。

個別に膳などないからめいめいの膝元に小皿を並べ、酒肴といえは野菜と身欠きニシンの煮つけや、鶏肉と長葱の煮物、きんぴらごぼうに井の漬物。焙つたするめのいい匂いは良作らを眠らせなかった。よく使われたのが鮭と筍を詰め合わせた「サケタケ」の缶詰めで、これは高価らしくみなので少しずつ分け合つて口にするようだった。稀にこれらの残り物が翌日の良作らの飯台にのぼるのである。

トモコの集りが良作らにとつてまるまる迷惑なだけかというところでもなく、この夜に限つて子供たちにも駄菓子の大盤振舞があつた。

三兄が小銭をにぎらされ、良作がくつついて二人で駆けたり歩いたりしながら菓子屋へゆく。好きなものを買つていいので、あれこれ吟味したあげくイナカマンジュウやマクロン、ビスケットやあめ玉などを買ひ込み、帰つてくると枕元に紙を敷いてそれらを飾るのである。

一度だけジンギがきたことがあつた。今夜はジンギがくるというので、良作たちは枕元に菓子を飾つてさつさと床に入つた。

その夜、菊五郎は一張羅の紋服に着替え、他の者も和服を持つ者は和服に、そうでなければめつたに着ない背広か、それもなければ菜葉服の襟に日本手拭をカラーがわりに巻いてジンギを待っていた。

やけにあらたまつた空気でいるうちに入口から印半纏の男が入つてきてそこで中腰になつた。夜具の隙間から窺うと、髪はばさばさの顔色の悪い男が見えて良作はいい氣持がしなかつた。

思ひ出したくもない二年前の恐怖が甦つたからだ、その夜のトモコのジンギは平穩に終わった。迎える側と来訪者との間に芝居がかつた応答があり、のちに知つたところでは、それがトモコの一宿一飯のあいさつというものだった。しかし氣味が悪いことに変わりはない。

その二年前、良作が小学校にあがつた年の五月に起こつたのが「花見の大乱闘」だ。当夜、良作の家では一家あげてまちばにある神社の森へ夜桜見物に出かけたのだった。姉が嫁いで義兄と

なつた森新太郎もいっしょだった。その上トモコの父の取り巻きが加わつて総勢十二、三人になつた。留守番は臨月近い姉だけである。

子供にとってはそろそろ眠くなる時刻、夜桜見物などのしくもないけれど、家中で出かけるのは小学校の運動会ぐらいだし、稲荷寿司や甘煮が入つた重箱もあれば金米糖もサイダーもあるので夜の遠足気分て手を引かれていったのである。

神社に着くころはもう夕闇が迫つていた。森への登り口のところで額から血を流した男が仲間の肩にすがつてくるのとすれ違つた。

一行は忠魂碑の広場を見おろす草むらに墓座を敷き、おとなたちは酒盛りをはじめ、子供らは夜風に少し震えながら重箱のものを食べ、サイダーをラッパ飲みした。

木々の間に張りめぐらした裸電球が満開の桜を下から照らして、花の向こうは暮れなずむ青黒い空だった。

花を見上げていてもしかたがないので、良作は金米糖を噛みながら忠魂碑の広場でふざけ合つてゐるふたりのおとなを見ていた。ひとりはおろりと横になつたりころげたりし、もうひとりが介抱でもするのか立ったりしゃがんだりしていた。

こつちの酒盛りが騒然としてきたのはそれからで、おとなたちが気がついてあれはなんだとなつた。広場のふたりがふざけ合つてゐると見たのが実は喧嘩で、立つた方の男がころがつた男の髪の毛をつかんで引きずり回し、しまいには沢の方へ蹴落した。

それでこつちから仲裁が入ったのだらうけれど、はじめは乱暴者を連れてきて、まあまあいっぱいやれやとでもいい、一方では沢に蹴落されたのを引き上げて水をぶっかけたりしているうちに乱暴者が暴れ出して花見の席がつかみ合いになったのである。

ところがこの男、喧嘩上手の豪の者で、良作の目には父親も入れて少なくとも五対一の喧嘩が一対一ほどのもつれ方であつた。男は五人力というわけだろうか。

まず着物姿の父菊五郎が地べたに這つた。そこへ仲間が倒れ込んで菊五郎は起きあがれず、むき出した前歯の金冠を良作は目を皿にして見た。義兄の新太郎も喧嘩っ早い男で、男と組み合つたままころがり、仲間がのしかかつて揉み合ううちに男が新太郎の顔に噛みつき、その下唇を噛み切つたのだつた。

良作は泣いたという記憶がない。三兄や弟がどうしていたかも憶えていない。ひとりで私たちの格闘劇を見ていたとしかいえない。

そのうちにこつちのトモコの剣道三段の広島さんだと思ふけれど、酒の入った一升壇で男の頭をなぐりつけると裸電球の明かりに黄色のしぶきがぱあつと散つて、ひとりで五人も相手にした男はもうだいぶ参つていたところだから、その一撃で目を回したところを寄つてたかつてとり押え、日本手拭か何かで後ろ手に縛りあげてやつと乱闘が終わつた。

三人がかりで引つ立てて、忠魂碑の急な坂の登り口にある警部補のところへ放り込んだそうだ。義兄の新太郎はというと、手拭で猿ぐつわをかまされ、トモコの肩にすがつて鳥居の階段をよ

ろよろと降りていった。白い手拭の中心にまっかなバラが咲いたようだった。十八、九になつていた長兄が、姉ちゃんにいうな！と良作たちに叫んで介添についていった。義兄は小学校の前の、校医でもある飯田病院に連れられていったのである。

花見の宴はめちやめちやになり、良作たちは次兄に連れられて、まだ震えながら一キロ半の道を逃げ帰った。

そのあと良作の家ではトモコが二度も三度も開かれたが、子供たちにはイナカマンジュウもマコロンも振舞われず菊五郎を囲んでひそひそ話ばかりだった。

サトーキチジがあゝの乱暴者の名前だ。キチジが牢屋から出てきたら唇を噛み切られた義兄の仇討ちをするのかと思つたらそうではなく、キチジが仕返しにきたときのことが相談の中身だったようである。

車座の中に剣道の広島さんが本ものの刀を抱いてあぐらをかいていた。キチジが現れたら本当に斬るつもりだったかもしれない。おとなたちの口から何度もキチジの名が洩れてきて、ほんといやな恐ろしいトモコであった。

サトーキチジはふたたび現れることはなかったけれど、良作はその名を忘れることがない。

炭碯の花見に喧嘩はつきものといつてよかった。花見といえば男たちはまさかのときのため刃物を隠しもち、子供を連れていった。酔漢も子供連れには手を出しにくいからだろうが、良作が一年生のときのあの乱闘劇ではこっちに三人も子供がいたのにこれが通用しなかった。長じての